

伸びていく人

2023. 2. 15

目標に対してのやる気がどれだけ高いか。きょうは疲れているからやらないとか、自分には無理だとか言って逃げる人は上がってこない。

駒澤大学陸上競技部の大八木弘明監督の言葉である。伸びていく人と途中で止まってしまう人との違いについてである。

果たして、学校の先生は伸びていく人なのだろうか。伸びていく人が教壇に立たなければ、伸びていく子どもたちを育成することはむずかしいだろう。疲れていてもがんばる人は多いように思う。だが、自分には無理のほうはどうだろう。自分には無理という思考の持ち主に教えられたら、子どもたちはどうになってしまうのだろう。

自分には無理という人は、結局は大八木監督が言うように逃げているのかもしれない。逃げれば楽かもしれない。失敗もない。だが、成長も収穫もない。一般的に、先生というものは失敗をおそれる傾向にあるのだろうか。失敗は誰でもしたくはないだろう。失敗しようとして失敗している人はいない。

チャレンジしない人に魅力はあるのだろうか。チャレンジには失敗はつきものである。失敗から学ぶことが多いのも事実である。チャレンジしないことが失敗だという考え方もある。チャレンジする人のほうが、生き生きと輝いているように見える。

教員は、絶えず研究と修養に励まなければならない。研究と修養で研修なのだが、この研修という言葉に惑わされていけない。教員は、よく研修をしている。その中身は、多くが研究に関わることである。研修＝研究になってしまっている。修養が弱いのである。絶えず修養に励まなければならないのに、その実態はどうであろうか。

研究に関しては、その方法や内容が示されることが多い。今まで蓄積されたものがある。一般化されたものがある。一方、修養はどうであろうか。修養の内容や方法と言われても困るだろう。教員は、研究に比重を置きすぎではないだろうか。修養をあまりしていないのではなかろうか。研究会はあるが、修養会はあまり聞かない。教員は、教えることは好きだが、教わることは嫌いな人が多いのではないか。

教員の場合、伸びていくのは、修養に絶えず励んでいる人のような気がする。研究だけでは足りない。修養も必要である。研究と修養のバランスである。私のまわりには、教員の修養のための会がある。ずっと長年続いている。なぜ続くのか。参加者が、その重要性を認識しているからである。自分のためになっていることを自覚しているからである。

これからも、修養とともに、自分が伸びていこうとする姿勢を持ち続けたい。そして、伸びていく人を育てていきたい。